

魅惑と幻滅のパターン

——マードックの初期の小説の場合——

依岡道子

A Pattern of Enchantment and Disillusion in Murdoch's Early Novels

Michiko YORIOKA

アイリス・マードックは、エッセイ「乾燥性を否定する」(“Against Dryness”)の中で、現代の小説家はきれいにまとめあげた神話や、ちっぽけなアレゴリーで読者を慰めようとする
と述べ、彼らが現実を取り扱っていないと批評している。

On the whole: his truth is sincerity and his imagination is fantasy. Fantasy operates either with shapeless day-dreams (the journalistic story) or with small myths, toys, crystals. Each in his own way produces a sort of “dream necessity.” Neither grapples with reality: hence “fantasy,” not “imagination.”¹

現代作家の「真実」とは「誠実」であり、「想像力」は「幻想」であり、幻想の描く世界は小さな神話だと看做している。小説家の採るべき態度は、「誠実という自己中心的概念」(the self-centered concept of sincerity)から、「真実を他者中心的概念」(the other centered concept of truth)をもとめるべきだと言う。彼女の小説論は、現実の偶然的な世界をあるがままに捉えて描き、現実の中に真実をもとめようとする現実認識の上に成り立つ。しかし彼女の小説は技法上、従来の19世紀的リアリズムの基準から判断される時、S. W. Dawsonのように彼女の現実観に疑いを持つ批評がなされる。

If we are often uncomfortably aware in Miss Murdoch's novels of the contingent world as a carefully constructed 'set,' which her characters inhabit but are never at home in, it is also difficult to resist the feeling that the characters themselves are being manipulated according to a pre-established pattern.²

彼女の小説には一定のパターンが見られることは確かである。殊に、初期の小説にはそれが顕著である。共通の社会を基盤とした日常生活に収まりうる real people の描写を期待するならば、彼女の小説は丹念に仕組まれた舞台装置の上で、恰も人間が操られているかの如く思われ、Dawson のような批評がうまれる。この様式化をどのように理解したらよいかを考察したい。

マードックは1954年に小説として第一作の *Under the Net* を発表して以来、1974年の *A*

Word Child に至るまで殆ど一年に一作ずつ発表している。その作品に於て、内容・形式・技法の面で一作ずつ変化を見せているが、各作品は同一作家のものとなる印象を与える。閉ざされた状況、クライマックスに行くべくしてクライマックスが剥ぎとられたような割り切れぬ不可解な雰囲気が残る。更に、共通する一つの様式、即ち「魅惑」と「幻滅」のパターンが見られる。彼女の初期の小説を中心に、このパターンを指摘してみる。

Under the Net (1954) の主人公ジェイクは、自尊心が強く、宿命観を持つ小説家志望者である。彼の魅惑の対象は、ヒューゴとアナであり、この二人の追究の間に生じる偶発的事件を素早く一つの概念にまとめ上げてしまう。事の真相を知らされ、自らヒューゴの呪縛にかかっていたことに気付く。魅惑からの覚醒と共に作家の道への再出発を決意する。

The Flight from the Enchanter (1956) では、題名の示す如く、「魅惑者」(the enchanter) と「魅せられたる者」(the enchanted) の間に、複雑な人間関係の展開が見られる。魅惑者のミッシェルは、氏素姓の知れぬ謎めいた人物であり、不可解な暗闇の帝王を思わせ、彼に魅せられているローザにとって、彼への感情は恐怖でもあり憧憬でもある。彼女はイタリアの別荘に彼を訪れ、陽の光の中で彼の真の姿を目撃した時、“It’s odd,” she said, “in the past I always felt that whether I went towards him or away from him I was only doing his will. But it was all an illusion.”³ と言い、現実への覚醒と共に魅惑者から解放される。

The Sandcastle (1957) は、高校教師モアが若い女流画家レイン・カーターに出逢い、彼女と新しい自由な生活を築こうとする彼らの魅惑の世界のことである。彼は魅力溢れるレイン・カーターを媒介として、絶対的自由に魅せられていたが、それは砂の城の如く脆く崩壊する。

The Bell (1958) では、魅惑者は人間ではなく Imber Court の湖底に沈む鏡であり、この信仰会に集まった人々の信仰の態度をうつし出すという象徴的意味を持っている。マイケルの場合、信仰生活を宿命と感じているが、それは神への愛ではなく、日常生活からの逃避であり、神への甘えであった。彼も又、幻滅と共にその閉ざされた世界から、外の世界へと去って行く。

A Severed Head (1961) では、男女三名ずつの人物達の八角関係の愛のアラベスクの中で、マーチンは象徴的人物オナーに魅せられている。彼女は自らを「切られた首」(a severed head)⁴ と称している。その象徴的意味は別として、マーチンは彼女と彼女の兄パーマーとの incest を目撃し、呪縛は解かれ、彼女への愛を覚える。

以下 *The Unicorn* (1963) や *The Time of the Angels* (1966) に於ても、特に物理的に閉ざされ、囚われた状況の中で、その住民のハナやキャレルに、周囲の人物達が魅せられているが、*The Unicorn* では、ハナの死と同時に、彼女の正体に気が付き、魅惑された者達の一人は、「彼女の呪縛はとけ、その魔力はいっさい吹き払われた⁵」と漏らす。

以上のような「魅惑」と「幻滅」のパターンを繰返す理由は何か。マードックは小説に於て、人物達の day-dreams や illusions を次々に告発して、現実を「自己中心的」に捉える事をやめ「他者中心の真実」をもとめるべきであり、「自我の消滅」こそ愛への道の第一の条件だと主張しているという批評がある。ラビノヴィッツは次のように述べている。

Iris Murdoch uses all of these allusions to provide an atmosphere of fantasy and enchantment. The characters in *The Unicorn* attempt to live out

roles, to govern their lives by myths, till they are prisoners of their own fantasies. To live according to a myth destroys contingency ; if one is deluded by fantasies, it is impossible to see, and to love, others.⁶

更に、パイアットはマードックが批評するサルトルの主人公の性質をマイケルに適応させて „All these qualities are clearly present in Michael—”⁷ と言い、マイケルが “neurotic” だとしている。

ところが、“contingency”, “fantasy”, “myth” 等々のことばは、マードックの評論「乾燥性に反対して」の中で彼女の使用している用語をそのまま借用しているものである。彼女は人生の真実をありのままの現実に見い出そうと言っているが、幻想を告発するとなると、作品では幻想の世界、デフォルメされた現実のみが描出されていることになり、現実の外にあることになる。そして作品の中で、マードックは小説論を展開していることにもなる。マードックは現実を分析するのではなく、「現実の無差別の豊饒性と特異性」(the undiscriminated richness and particularity of “reality”)⁸ や「人間および思想の世界の非還元性」(the irreducibility of man and the world of Thought)⁹ を恐れず、描写することを表明しながら、主人公達の行為はそれを裏切っている。幻想を告発しているという立場には、一つの混乱があると考えられる。即ち、マードックの文学理論も倫理哲学も、共に他者の認識の上に立つ「善」を基盤にしているが、文学理論と倫理哲学とを小説の中で直接的に関連づけているということである。マードックが “We need to return from the self-centred concept of sincerity to the other-centred concept of truth.”¹⁰ と言う時、これは創作の際の作者の心構えを述べたものであって、ethics として人間のあり方を人物達の誤った行動を通して読者に説得しようとするものではないであろう。小説中の人物達は egoistic で solipsistic で illusion に翻弄される人間であり、彼らの魅惑・誤解・苦悩・幻滅が、他者との関係に於てつきることなく描写されるのは、人間の「不透明性」に吐気を催さない、作者の他者への関心の強さを物語るものである。人物達の行為をモラルに照合させるか否かは、読者の側の問題であり、作者の関知せぬところであろう。illusion に幻滅する人物達の姿は、小説家として神であることを放棄している作者の態度である。マードックの倫理哲学は他者を尊重することを「善」と見做しており、その意味に於てマードックの “A work of art is as good as its creator.”¹¹ という公式が成立する。

「魅惑」と「幻滅」のパターンを、モラルとして捉えるのではなく、小説の一つの構図と考えたい。魅惑者は魅惑された者を、ある一つの方向即ち、カタストロフィーへと導いてゆくガイドの役割を演じている。魅惑者と魅惑された者は、その関係を堅持しつつ、小説の展開と同時に、小説の背景を構成する助けを為している。魅惑者は、閉ざされた状況の中において人間関係の中へ主要人物達を引き込み、人々を惑わし乍ら、人物達の行動を促す。従って魅惑者は、「悪」である必要はない。「悪」らしく見えるのは、ミッシュャやキャレルであり、ヒューゴーやオナーは善き人物であり、その中間には、「鐘」のような象徴的意味を持つ物体があるだろうし、抽象的概念の「絶対の自由」ということもある。

マードックは現代は小説家が人物達を自信を持って世に送り出すことの難しい時代であり、共通の総体性を持たぬ社会は、小説家にとって不幸な時代だと考えている。シンボリストの恐れているのは、“the real existing messy modern world, full of real existing messy modern persons, with individual messy modern opinions of their own.”¹² だと言

う。このような社会にあって、小説の背景及び人間の状況はかなりの部分を作中人物に託すべきだと考え、「魅惑」と「幻滅」のパターンを利用しているのではないか。魅惑する者と魅惑される者という（魅惑する者にはその意志はないのだが）人間関係を一つのパターンとして設定し、複数の人物を配して、彼らの間に *cumulative relations* を生ぜしめる。*cumulative relations* の間に、現実を的確に捉えられない人間がいる。自らの意志で魅惑の対象をつくり上げ、幻滅する。それが人間の置かれている現状と見做していると思われる。

魅惑されたる者は、カタストロフィーの直前まで引擡られ、幻滅と共に現実への覚醒を示すものの、その後回復と現実への確実な始動があるいは、再び魅惑へ戻るかは不明である。その点がマードックの作品は読者に割り切れぬ印象を与える理由の一つである。魅惑されたる者の状況は物語の当初も、物語の後も、外面的に大きな変化は見られず、真にカタストロフィーらしきものはなかったという印象を受ける。魅惑者が消えた後には何か割り切れない不可解な、不透明なものが印象として残る。それがマードックの強張する「不可知の現実」(*transcendent reality*)¹³ の一つの表現と見てよいのではなからうか。

マードックは “The novelist proper is, in this way, a sort of phenomenologist.”¹⁴ と述べているが、それは人間の行動にじっと眼を注ぎ客観的に記録するという姿勢である。“He has always been, what the very latest philosophers claim to be, a describer rather than an explainer;”¹⁵ という小説家の立場を、彼女はずっと保ち続けている。彼女の小説に於ける人間の現象学的描写の裏付けとなる哲学は、ヴィトゲンシュタインの「世界の全ての全てはあるがままにあり、生起するがままに生起する。」¹⁶ という現実の認識から出発しているが、マードックは現実の多様性、偶然性をそのまま容認し、体系化せずに描出し続けているといえよう。

注

- 1) Murdoch, Iris: *Against Dryness*, *Encounter*, 88, 19 (1961)
- 2) Baldanza, Frank: *A Question of Contingency*, *Essays in Criticism*, XVI, 3, 334 (1966)
- 3) Murdoch, Iris: *The Flight From the Enchanter*, 308, Chatto and Windus, London (1956)
- 4) Murdoch, Iris: *A Severed Head*, 225, Chatto and Windus, London (1961)
- 5) Murdoch, Iris: *The Unicorn*, 308, Chatto and Windus, London (1963)
- 6) Rabinovitz, Rubin: *Iris Murdoch*, 35, Columbia University Press, New York (1968)
- 7) Byatt, A.S. : *Degrees of Freedom*, 96, Chatto and Windus, London (1970)
- 8) Murdoch, Iris: *Sartre*, 35, Yale University Press, London (1967)
- 9) *Ibid.*, 13.
- 10) Murdoch, Iris: *Against Dryness*, 19-20.
- 11) Murdoch, Iris: *The Black Prince*, Chatto and Windus, (1973) (Introduction xi)
- 12) Murdoch, Iris: *The Sublime and the Beautiful Revisited*, 260, *Yale Review* XLIX (1959)
- 13) Murdoch, Iris: *Against Dryness*, 17.
- 14) Murdoch, Iris: *Sartre*, (Introduction ix)
- 15) *Ibid.*, (Introduction x)
- 16) L. ヴィトゲンシュタイン, 藤本隆広他訳: 論理哲学論考, 195, 法政大学出版局 (1972)